貝坂倶楽部

—季刊 2014 夏号 通巻第 29 号—

樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。江戸名所図会には ‘この地は昔から甲州街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、甲斐塚とよびならわせしとなり’ とある。貝塚であったのが現在定説となっている。

発行 NPO つくしくらぶ

目 次

寄稿者一行紹介		
私の愛用品	藤原　英郎	3
世界寄り道紀行	南　石堂	6
童謡100年プロジェクト	高橋　育郎	12
75歳でフルマラソン	高松　良晴	14
H2O	田村　徹	17
TEA TIME: 戦後日本の発展を支えたイノベーション		20
TPPと PPK	関　　敦	22
What? Why? How?	高松　泰代	24
人身事故	渡辺　成典	26
デルフィニューム	藤原　昌子	28
サウディアラビア訪問記（3）	藤井　能成	30
子どもと養子の激減	湯沢　雍彦	33

寄稿者一行紹介

藤原　英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
南　　石堂	国際コンサルタント
高橋　育郎	国鉄マン、日本童謡協会会員、日本橋「心のふるさとを歌う会」代表
高松　良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事
田村　徹	研究員→国連環境計画局→大学教授→環境コンサルタント
関　　敦	非鉄金属メーカー機械技術者
髙松　泰代	NPO つくしくらぶ　理事長
渡辺　成典	民生委員
藤原　昌子	NPOつくしくらぶ　副理事長
藤井　能成	化学系技術者、分離膜研究開発に従事
湯沢　雍彦	お茶の水女子大学名誉教授

ー出てみてわかった世界ー

私　の　愛　用　品

藤原　英郎

この年になると、愛用品もしだいに固まってくる。今回はこの中から腕時計とカレンダーについて書いてみたい。まず腕時計であるが、1970 年だったと思うが、小生はドイツとイタリアの銀行研修生として初めて欧州へ行った。当時はアラスカのアンカレッジ経由で、北極海を越えてドイツのフランクフルト・アム・マインに到着した。空港には当時ドイツ外債発行のために来ておられた銀行の先輩が出迎えてくれた。翌日、ムルナオという町にあるゲーテ協会でドイツ語の研修を受けるべく出発した。ムルナオはミュンヘンから南へ汽車で１時間のところにある小さな町である。ムルナオについては書きたいことはいろいろあるが、一つだけ触れておくと、後年になってスイスのチューリヒに勤務した折り、再度訪れたことがある。庭にあった木が大きくなっていたのには驚いた。ムルナオで予定の 2 か月の語学研修を終えて、フランクフルトへ戻り、ドイツの銀行での 6 か月の銀行研修が始まった。

銀行研修で最も強調されたのは正確なドイツ語であった。ドイツの銀行の役職者は皆さん英語を解する。国際部の担当者も同様である。しかしわれわれ研修者に対しては、絶対にドイツ語以外の言葉は話さない。それは徹底していた。各自各部を順番に研修で回るのであるが、ドイツ語でのみ話をし、それは徹頭徹尾そうだった。昼食は、前にも書いたように、テーブルクロスのある丸テーブルで頂いたが、そこでも同じであった。やむなく、われわれ研修生は本屋でドイツ語の入門銀行研修書を購入し、通帳伝票をはじめとする銀行用語をドイツ語では何と表現するのかを学びはじめた。一日中ドイツ語漬けの日が始まった。これから先はどうなることかと案じられた。

宿泊は、銀行が用意した地方から出張してきた人のための独身者専用のアパートであった。簡単な食事を作れる調理道具と食器があり、冷蔵庫もあった。シャワー室があり、管理者がいて暖房その他の世話をしてくれた。ここで数人の日本人が暮らした。そのうち日本人の間で、各自が部屋を提供し、お互いにメシを炊くもの、オカズを作るもの、ワインを用意するものと分担を決めることとなった。ここで交わされる会話はもちろん日本語のみであった。完全に昼間とは違う生活があった。子供がいて中年になってから研修生活をはじめた人もいて、やはり日本語で思い切り話せる場所が欠かせないと思った。ドイツの銀行は銀行業と証券業は兼営なので、証券会社からの人々もいたが、皆同じ思いだった。

ある日、街を歩いていると時計屋が目に付いた。そうだ。ドイツ語漬けの毎日を記念して、ドイツ語の入った腕時計を購入したらどうだろう。記念品となるかもしれない。そこである時計屋に入って購入したのが、今でも腕にあるオメガのシーマスターである。50年近くもわが腕にあり、健在だ。この腕時計は当時の流行でもあったが、曜日と日付が入っていた。しかも曜日の表示がドイツ語である。MONはMontag(月曜日)、DINはDienstag(火曜日)、MITはMittwoch(水曜日)、DONはDonnerstag(木曜日)、FRIはFritag(金曜日)、SAMはSamstag(土曜日)、SONはSonntag(日曜日)というわけである。

これだけ長い間使っていると、時々は故障する。その後ロンドン支店に勤務していた頃、時計屋に修理してもらったことがある。しばらくして、曜日の表示が英語になっていることに気がついた。せっかくドイツ語の文字盤にしたのに、これでは台無しである。そこで時計屋に相談すると、ドイツ語版はあるが、取り寄せるのに数週間かかるとのことだった。訳を話し、何週間かかってもよいからと取り替えを頼んだ。数週間経ってから無事に元のドイツ語版に戻った。ほっとするとともに、ドイツ語で苦労したことも思い出した。その後スイスのチューリヒに５年程勤務したが、その時は故障はなかった。

東京に戻ってからは、本来は自動巻であるが、その部分が故障した。銀座のオメガの店に直してもらったが、どうもうまくいかなかった。もともと手巻きもできるので、現在は毎晩手巻きで使用している。時計そのものは正確無比であり、このまま使用したいと思っている。

次はカレンダーである。一つは古地図を扱ったものであり、毎年年末に丸善で購入している。日本古地図学会に関与したものにとって毎年記念のものである。もう一つはかなりユニークな品であり、おそらく日本でこれを毎年購入しているのは小生のみであろうとひそかに自負している。。小生はロンドンにいた頃、大清帝国、中華民国、ロシア帝国、日本の戦前外債等々を収集したことがある。ロンドン、パリ、ニューヨークにこの種の古物商があり、ドイツには特に多い。古地図商とは異なる存在である。専門誌のScripophily(四半期刊)も今でも購入している。日本には残念ながらこの種の古物商はない。

さてこのカレンダーであるが、ドイツのこの種古物商が毎年作成している。これは１枚に２か月分が表示されたカレンダーであり、その一つ一つに本物ではあるが既に無効の株券自体が６枚付いている。この種株券は古いもので、イラストも多く、それだけに収集の対象となっている。そして統一表題として、今年度分は、Calling America… と表示されている。その株券の下部には、

ドイツ語、英語、フランス語で１０行程の会社の説明が付いている。毎年10月になるとメールでこのカレンダー注文を出すのが、楽しみなのである。

　さてこの株券(債券とともに古証券と称したい)であるが、国によっては株券が印刷発行されない国がある。最近日本の上場株券も、株式の取引が全て電子化したので廃止になった。フランスの上場銘柄もかなり前からそうなっている。ただし例外があり、外国人が株主の場合には、特別に印刷発行する。それを宣伝材料とする古物商がある。発注すると、かなり時間がかかるが、印刷された株券が届く。このようにして入手したのが、下記に示すパリ郊外のユーロディズニーランドの株券である。

世界よりみち紀行

南　石堂　（山本紀久雄）

先日、異業種交流会で講演する機会があった。中小企業経営者などが多く、熱心に聞いていただいた。講演後、参加者と名刺交換し、質問を受けて気づいたことがあった。

それは、当然とはいえ、改めて確認したことであるが、「**日本から日本を見る**」という思考になっているということである。毎月海外に出かけているので、必然的に「世界から日本を見る」という思考を展開すべく心掛けているが、やはり「そうか」と感じた次第である。例えば、バラの花をテーマに起業したベンチャー経営者と名刺交換し、その事業概要をお聞きしたので、「バラはパリのブローニュの森のバガテル公園が著名ですね」と伝えると、怪訝な顔をする。初めて知ったらしいのである。

新しい事業を始めるに当って、まず必要なのは「集める」作業、つまり、自らが狙う市場の情報を集めておくことだろう。また、その情報は世界中にあるわけで、日本国内にとどめておくことは、狭い範囲での「集める」作業になってしまうから、発想に広がりを欠く傾向になりやすい。だが、それらを補って余りあるのが、起業家の凄まじいまでの意欲と、工夫努力であり、これを武器に強力に国内で事業を展開している事例を多く見る。しかし、その工夫と努力によって、他企業に差をつけようとしている内容を少し深く分析してみると、その差異は「外部からみてあまり違いの分からない、ちょっとした内容」になっているように感じる。その上、日本国内の流通サービス業における客対応力は、世界的にみて高く評価されているように、細やかな気配りがきいた上質レベルであって、この対応に慣れ切った日本の消費者を相手にするのであるから、差異化へ投入するエネルギーと、そこから得られるアウトプット果実を比較すると、あまり効率的ではない。

ということで、情報を「集める」作業は、国内だけでなく、外国の情報も集め、その過程で外国人とつながりをつくり、それをきっかけとして外国進出も検討した方がよいのではと、名刺交換したベンチャー起業経営者に話したのであるが、「話は分かるが外国とのとっかかりがない」ので無理だという顔をする。多分、このような起業家が多いのではないかと推察する。そこで、今号では、先日開催した「日独交歓音楽祭」、これは民間外交として展開したのであるが、その経緯をお伝えすることで、外国人との接点はこのようにすると出来るという事例を紹介したい。縮小していく国内市場対策として、外国進出が大事であることをすべての経営者は知っているが、そこへの道筋に悩んでいる方への一つの事例として参考にして頂きたい。

ドイツ南西部に位置するバーデン・ヴェルテンベルグ州の都市カールスルーエ(Karlsruhe)は、日本ではあまり知られていない。日本人には温泉保養地として著名なバーデン・バーデンの方が知られている。そのバーデン・バーデンから29キロメートル、

急行列車でたったの15分のところにカールスルーエは位置している。カールスルーエは城を中心に町がつくられており、街並みを歩いていくと、城の両側の側面から延びる道路が、城を基点として扇形に延び、その扇形の中に中心市街地が入っているので「扇の街」と呼ばれていることがよくわかる。また、街の中心にはマルクト広場があるが、この広場を設計したのがヴァインブレンナーで、バーデン・バーデンのクアハウスも設計したヨーロッパで屈指の設計家であり、市民はこの広場でくつろぎ、お祭りに興じるのである。

このカールスルーエには、ここ 10 年くらい毎年訪問しているが、カールスルーエには国際的に著名な国立音楽大学があり、世界中から留学生が集まっていて、その教授陣に二人の日本人がいることが分かってきた。一人はドイツ・リート歌唱で国際的に高い評価を得ている、声楽科歌曲クラスの白井光子教授、もう一人はベルリン・フィルハーモニーホールをはじめとする世界の一流舞台で活動を重ねる打楽器奏者の中村功教授である。白井教授とは、カールスルーエ市街の散策中や日本食レストラン、マルクト広場の合唱団コンサート会場などで何度もお会いしているが、この白井教授に師事した有馬牧太郎氏がカールスルーエ「独日協会」の合唱団を指揮・指導している。

有馬氏は東京芸術大学卒業後、カールスルーエ音楽大学に留学、卒業後、同大学の声楽科講師を兼ね、現在いくつかの合唱団の指導もしていて、カールスルーエの合唱団も有馬氏の指導下にある。この合唱団は、マルクト広場でのお祭りには必ずゲストとして歌を披露、それも全員が着物姿で登場し、最後には必ずソーラン節で盛り上げるので、客席から盛大な拍手が鳴り響く実力派である。

実は、この合唱団の有力メンバーであるチズマジア・三樹子さんが、筆者の通訳を担当してくれている関係で、自然に合唱団のメンバーとも親しくなり、自宅へ訪問し、ビアホールでお会いしているうちに、メンバーが合唱団に入るキッカケの実態が分かってきた。最初は、日本に対する興味からで、その興味と関心内容は人によって異なるが、結果として日本語を学びたくなり、どこへ行けば日本語を教えてもらえるかを調べているうちに、「独日協会」の日本語教室を見つけ、そこで日本語を勉強しているうちに、日本の童謡等が歌われている合唱団の存在を知ることになる。「独日協会」とはドイツ国内各都市に存在し、日独友好関係に寄与している民間組織であって、日本ファンの集まりである。さらに、合唱団は既に2007年に東北地方を中心に日本公演をしているように、合唱団に参加すると憧れの日本へ行けるチャンスもあるので、日本の歌を通じて熱心に日本語を勉強することになり、一段と日本に対する興味を強くもっていくのである。

この独日協会合唱団が、再び2012年の夏に日本公演を計画していると三樹子さんから二年前に聞き、加えて、東京でも公演したいという希望があると聞き、ふと東京・日本橋で合唱団を主催・指揮している高橋育郎氏を思い浮かべた。高橋氏とは長い友人であって、童謡の世界では知られている作詞家である。童謡とは広義には子供向けの歌を指し、狭義には大正時代後期以降、子供に歌われることを目的に作

られた創作歌曲を指すように、我々が幼年期からよく馴染み、歌ってきたものである。しかし、高橋氏はこの古い歴史のある童謡範疇を超えた、新しい現代感覚の作詞を創作していて、代表作として「大きな木はいいな」がある。その高橋氏から一昨年11月、第25回日本童謡歌唱コンクールで「大きな木はいいな」が歌われると聞き五反田の会場に出かけた。童謡歌唱コンクールとは日本童謡協会主催で、「子供」「大人」「ファミリー」の三部門があり、まずテープによる審査を各ブロック単位で実施し、その上位者が 8 月から 9 月にかけて行われるブロック決勝大会を経て、金賞受賞者が11月のグランプリ大会に出場し、金賞・銀賞・銅賞が決定するシステムで、テレビ朝日系列で放映される。一昨年のコンクール会場で一番前の席に座り、全国から勝ち抜いた童謡を聞いたが、さすがに皆さん上手いなぁと納得し続けていると、「大きな木はいいな」を歌う東海・北陸ブロック代表の宮内麻里さんが登場し、細身の体を少し傾け歌いだした。その瞬間、彼女のソプラノが、奥深き山の深淵から湧き出てくる清らかな澄んだ水の流れのように、ステージから会場の奥まで通り抜け、歌い終わったときには、これは「グランプリだ」と確信したわけだが、結果はその通りで、みごとに大人部門の金賞を受賞した。また、彼女の歌い方で特に感銘したのは「みんなではくしゅをしてあげよう」というフレーズであり、後日、彼女に確認すると「ここが最もこの歌で好きなところ」という。

参考までに「大きな木はいいな」の作詞を以下に紹介する。

大きな木は　いいな
わかばが　ひかって　そよいでる
うれしいのかな
たのしいのかな
風がさやさや　うたってる

大きな木は　いいな
あおばが　こんもり　すずしそう
あせをかいたね
やすんでゆこう
ゆうだちザァッと　ふってきた

大きな木は　いいな
はっぱが　きいろや　あかになり
ああ　きれいだな
ああ　うつくしい
みんなではくしゅを　してあげよう

これを作詞した高橋氏は元国鉄マン、JRに移管する際に退職し、以後は童謡作家として活躍しているが、国鉄時代も歌で貢献している。例えば、総武線・平井駅長

の昭和 61 年時代、団体旅行に力を注ぎ、地元の落語家と組んで、落語列車を走らせたり、町内から新人歌手がデビューすると、団体列車に添乗してもらい、同氏が作詞した「房総半島ひとめぐり」「ハッピーランド房総」を歌いテープ化したり、レコード化作品第一号の「シャンシャンいい旅夢の旅」を、踊りの師匠に振り付けしてもらい団体列車の勧誘などして、街の祭りや運動会でも同様で、歌で平井駅の増収を心がけたように、高橋氏はなかなかのアイディアマンでもあって、今は平成 4 年に始めた「心のふるさとを歌う会」を、日本橋社会教育会館で主催している。

しかし、肝心の童謡の世界は、高橋氏も、同氏が所属する日本童謡協会も、童謡歌唱コンクールのような素晴らしい企画を持ちながら、日本の子供たちが以前よりは童謡を口ずさまなくなっている。少しずつ子供の世界で童謡が下火化しているのが実態である。

この問題について、時折、高橋氏と話し合うことがあって、簡単に解決策が見つかるものでないが、方向性としては「国際化」の流れを取り入れることが必要であると提言している。外国での童謡はどのような実態なのか、童謡は日本だけのものなのか、そのような基本的情報を「集めて」、その「集めた情報」を時代に合わせて編集することで、長期的な対策構築を図って、童謡の世界を広げていくことであろうと話し合っている。

そのようなタイミングに、カールスルーエの有馬氏が指導する独日協会合唱団が、東京で公演することを希望していることを知り、高橋氏は日本橋に拠点を持っているのであるから、お互いが交流することで、両者の希望が適えられはず。

つまり、有馬氏は東京の中心である日本橋で公演開催が出来、高橋氏はドイツとの交流で童謡の国際化へのキッカケづくりになる、という両者のメリットをつなげるべく、カールスルーエ合唱団一員で筆者の通訳をしてくれている三樹子さんを紹介したわけである。三樹子さんは日本人であるから言葉の問題はなく、高橋氏は早速にメール連絡し、有馬氏とも関係づくりし、日本橋社会教育会館事務局とも連携し、独日協会合唱団「デア・フリューゲル」（注　翼という意味）の来日公演計画づくりに入っていったのである。高橋氏がカールスルーエと交信を始めてすぐに、千葉県館山市の踊りの師匠、里見香華さんを高橋氏から紹介された。里見さんは滝沢馬琴作の南総里見八犬伝に書かれた里見家の末裔で、「里見家物語をNHK大河ドラマに」と活動されていて、今年の五月にはNHK放送センターで、NHK幹部に署名活動の束と一緒に提案したという南房州をこよなく愛する素敵な女性である。さらに、国際的な行動派でもあり、一昨年はブラジル千葉県人会会館落成式に森田千葉県知事と共に出席し、祝舞として自ら振り付けをされた高橋氏の作詞「ああ、武士道」を踊り、大好評を得たという。

この里見さんと高橋氏と三人で会ったのは、千葉市駅近くの館山寿司の店であった。それまで知らなかったが、館山は魚の種類が多く、寿司店数が人口比で日本一ではないかと言われているほど寿司が有名で、確かに、その後何度か館山で寿司を食べたがうまい。

寿司はご存じのように世界の食べ物になっている。世界中の大都市には必ず美味い寿司店があるようだが、やはり、世界の観光客に聞くと、日本で食べると一味異なり、別格の本もの美味さだと称賛する。上海で日本ツアーの添乗員を務める中国人女性から聞いたが、日本に行って最大の楽しみは寿司だという。上海とは比べ物にならない美味さだという。その通りだろう。その日本でも美味いと言われている館山の寿司、それを食べながら里見さんと話していると、館山は関東地区では観光地として有名であるが、果たして世界レベルで論じた場合どうなのかという話題になった。そこで、世界の観光地にはランク付けがあり、その結果で観光客が増減することを里見さんに伝えると、突然、眼を光らせて、もっとその仕組みを詳しく話してほしいという。では、とお伝えしたのはミシュラン旅行ガイドである。このガイドに掲載されている東京周辺地図を見ると「東京」「日光」「高尾山」「富士山」の四カ所が三ツ星で、オレンジ枠で大きく表示されていて、高尾山に欧米人が多く訪れるようになった理由は、この三ツ星が要因。イエローで囲まれた二つ星は「鎌倉」「伊豆半島」「修善寺」「下田」の四カ所、黒字に赤線が引かれている一つ星は「横浜」「箱根」「中禅寺湖」「河口湖」の四カ所。その他星付きではないが、地名が書かれているのは「草津温泉」「湯元」「前橋」「高崎」「熊谷」「甲府」「成田」「千葉」「木更津」「富津」「銚子」「横須賀」「小田原」「三島」等となっていて、残念ながら館山は掲載されていない。どうして掲載され、何故に表示されないのか、その疑問を解く鍵は簡単明瞭で、このガイドブック作成のライターが訪問していないからで、訪問しないのはライターの手許にその観光地の情報が届いていないのである。という意味は、訪問させるような情報を観光地が発信していないということで、具体的に言えば英語か仏語による観光資料が作成されていないからだと解説したところ、里見さんの眼はワールドカップのアメリカ戦決勝でシュートを決めた澤選手のように、新たなる好機を捉えたというような鋭い輝きに急変化する。

里見さんと別れて二三日後、里見さんから電話があり、館山で観光協会と市の観光課長へ「外国人観光客誘致」について解説をするよう要望された。さすがに行動派の面目躍如で、あの時の輝く鋭い眼が市役所と観光協会を動かしたのである。その後、いろいろ打ち合わせや調整があったが、今年の４月に館山市で「外国人誘致セミナー」を開催することが出来た。講師に筆者の友人でフランス人のガイドブックライターであるリオネル・クローゾン氏を迎え、併せて房総半島の取材を行ってもらい、クローゾン氏講演会とパネルディスカッションを開いたのである。これ等一連の動きから、高橋氏が有馬氏と連携して計画化してきた独日協会合唱団「デア・フリューゲル」の来日公演企画も、当然に里見さんの耳に入って、再び、国際派の里見さんは館山国際交流協会に働きかけ、８月末に館山と日本橋で「日独交歓音楽祭」が開催されたわけである。館山は千葉県南総文化ホールにて、日本橋は日本橋社会教育会館にて開催されたが、様々な方面からの出演プログラムが組まれ、二会場とも満員、大盛況であった。

当日はいくつかの市の市会議員も来ていて、所属する市もドイツと文化交流したいと高橋氏に申し入れがあったとのことで、外国との関係づくりに少しでも貢献できたとす

れば、大成功の「日独交歓音楽祭」であったと思う。また、今回の「日独交歓音楽祭」が開催されたことは、外国との取っ掛りが難しいと思って、海外との民間交流を逡巡し、海外進出を躊躇している経営者に参考になったのではないかと思う。

外国との関係づくりは一般的には難しいと思いやすいが、いろいろ考えれば方法はあるわけで、その重要な一つとして外国との接点キーワードを挙げれば「日本語教室」の活用であろうと思う。日本に興味持つ外国人の多くは、日本語を学びたいと思い、当然のごとく「日本語教室」を訪れる。また、教師は日本語が出来るし、現地在留日本人が教師をしている場合が多いので、外国語が苦手という言葉の問題はクリア可能である。カールスルーエの有馬氏が合唱団の会員を増やしたのは、日本語教室にアプローチしたからだと有馬氏は述べており、さらに、東京での公演を希望していることを筆者に伝えたのは、合唱団所属で通訳の三樹子さんである。今回のように外国の地に住む日本人と、その方が所属している日本語教室や趣味の会を通じれば、割合簡単スムースに外国人とつながりを持てる。

経営者として、未知の海外リスクを勘案し、海外展開を躊躇するという気持ちは当然だとしても、日本国内でのシェア争いで「外部からみてあまり違いの分からない、ちょっとした内容」という差異化に、凄まじいまでの意欲と、工夫努力を続けている現状を見ると、随分無駄なコストと体力を消耗しているわけで、それよりも日本の素晴らしい品質・技術を持っていけば、かなり高い成功率となると思っている。

そのためには狙うべき外国の地情報を「集める」作業を行い、日本国内情報も「集め」、それらを狙い定めた外国へ発信すべく編集し、外国の地と何かのキッカケづくりに努力する事だろうと思うが、その成功例が今回の「日独交歓音楽祭」である。

（日独交歓音楽祭 2012 年 10 月号より）

童謡100年プロジェクト

高橋　育郎

童謡は大正7年7月に誕生した。4年後に100年となる。

その童謡の現状をみると、ほとんど歌われなくなってきている。

かつて国民に広く愛唱されていた往時を偲ぶと、なんともさびしい気持ちになる。

そこで、童謡の持つ文化価値を、100年を迎えるに当たって見なおし、復活させたいとのねらいから、このたび民間任意団体がプロジェクトを立ち上げた。私はここに誘いを受け、この運動に喜んで参画した。

童謡の生みの親は、漱石門下の鈴木三重吉である。私小説作家で「桑の実」「千鳥」が知られている。三重吉は娘が誕生した時、わが子にいいお話、いい歌を与えたいと思った。いうなれば情操教育の立場から思いを馳せて、周囲を見渡したが、その期待に応えうる芸術的に価値ある作品が、見当たらないことに気付いたのだった。それならばいっそのこと自分で作ってしまおうと決心して、童話と童謡の雑誌「赤い鳥」の創刊に踏み切ったのである。

童話では、当代一流の巌谷小波、竹久夢二、小川未明、芥川龍之介などの寄稿があったが、童謡は一般への呼びかけによる投稿誌にしたのである。そこで三重吉は選者を誰にするか、ここに思いをいたし選考に苦慮した。当時、北原白秋、三木露風が白露時代と言われるほどに巨頭として並び立っていた。

結局、いろいろ打診した結果、白秋をえらび、当時新進気鋭の西条八十を補佐とした。「赤い鳥」は、その文化的価値が、特に中産階級の家庭に認識され熱く迎えられ、たちまちにして広まって行った。投稿者のなかで頭角を表わしたのが巽聖歌、与田準一、佐藤義美、小林純一である。

三重吉は当初、童謡詩に曲を付けるという考えは毛頭なかったのである。

しかし、八十が「かなりや」を書いたとき、曲を念頭に置いた。三重吉もその気持ちに傾いていた。そこで山田耕筰に依頼したが、ちょうどドイツ留学を目前にしていたので、後輩の成田為三にまわした。彼もまた童謡に曲を付けたいとの意欲があったので、チャンスと捉え作曲した。そして小学生に歌わせ、その場に三重吉を招いた。小学生の純真無垢な歌声に触れると、三重吉は感激のあまりに大粒の涙を流したといわれている。そうしたことがあって童謡には曲が付いて歌うものということが定着したのである。

白秋が童謡を作るに当たって、参考にしたのは、日本の各地で歌い継がれている「わらべうた」だった。子供の素朴で率直な思いが込められているからである。初期の歌に「赤い鳥小鳥」がある。これは青森県のわらべ歌が下地になっている。

「赤い鳥」がもてはやされると、野口雨情がこれを追って「金の船」を出し、続いて「童話」「コドモノクニ」が出て、表現はよくないが雨後のタケノコのごとく、童謡の同人誌は全国に波及して行った。

こうして三重吉の狙いは見事に的中したのである。

大正の童謡は、文化の香り高い大正ロマンの時代背景を受けて生まれ、芸術性が高いがゆえに芸術童謡と呼ばれている。

この時代に活躍した詩人では、白秋、八十、雨情、露風のほか、山村暮鳥、川路柳虹、若山牧水、浜田広助、相馬御風、竹久夢二などがあげられる。

昭和になると、サトウ・ハチロー、大村主計、鹿島鳴秋。女流では、権藤はな子、武内俊子、金子みすゞ、真田亀久代らの存在が目立つ。

作曲家でいえば、為三のほか弘田竜太郎、本居長世、山田耕筰、佐々木すぐるらで、長世の場合は娘さんの三人姉妹が、いずれも歌手で父親の作品をもとに全国行脚して、童謡の普及につとめ、帝劇でコンサートをして、大きな感銘を与えた。

昭和になるとレコードが出現し、レコード童謡と呼ばれ一線を画した。戦中戦後は川田正子が、主に海沼実の作曲作品で、ラジオを仲介して人気を博し貢献度は特筆に値する。NHK では5年に一度の特集番組を設けていた。

戦後は商業主義に傾斜していくが、ここに本来の純粋性を保って行こうと立ち上がったのが、中田喜直、磯辺淑ら5人組のロバの会で、テレビという新たな媒体を通して、名曲の数々を生みだし親しまれていった。

作詞ではサトウ・ハチローが中心的に活動をはじめ、昭和44年4月に日本童謡協会を設立したのである。二代目が中田喜直、いまは三代目の湯山昭である。私はここに平成5年、中田喜直会長のもと入会の栄に浴した。

協会では「赤い鳥」を創刊した7月Ｉ日を童謡の日と定めている。

今回、プロジェクトを立ち上げて間もない今年の4月に、私はリーダーを協会に案内して、企画書の説明をおこなった。

企画の主な事柄は、大正の芸術童謡を無形文化遺産に登録したいということだ。そして童謡の常設館ともいうべき童謡館を設立し、更に童謡の名作を訪ねての観光団体旅行。駅の発車ベルに、ご当地童謡を組み込む。まだまだある夢の企画は枚挙にいとまないほどである。

童謡は世界に誇る日本独自の文化である。三重吉が娘さんの誕生を祝って、健全な成長を祈る時、心の糧となるいい歌を与えようと、いわば親の情愛から生まれた産物であり、親が子供を思って作品作りをしたという、このようなジャンルを打ち立てた例は、他国には見られないものだ。だから、世界に誇れる独自の文学であり音楽といえるのである。（以上）

2014、5記す

75 歳でのフルマラソン

髙松 良晴

☆ 東京マラソン

平成 26 年(2014 年)1月 23 日(日)、第8回東京マラソン、22 km地点の銀座通り、北の浅草へ向けて市民ランナーの群れが流れて行く、手を振る人、仮装の人もいる。走り去るランナー達に「頑張れ！」と、大声をかける。

私は、これまで毎回応募するも8回すべて落選だ。友人に、「今回も落選だよ」とぼやいたら、「きっと、あなたは、別のところで大きな当たり籤を引いている」と、粋な言葉が返ってきた。

世の中、大体は思い通り行かないのが現実だ。しかたない。

参加したつもりで、ランナーの流れに沿って歩道を走ってみる。

だが、とてもついていけない。これから先、仮に参加できても、制限７時間内の完走はもうとても無理だ。

でも、無理と知りつつも、東京マラソン、一度は走ってみたいな、と思う。

☆ 皇居周回マラソン

私は 50 歳代後半までの仕事の合間の趣味は、カメラを持っての山登りと、太りすぎ糖尿病防止のため街のスインミングプールでバチャバチャと泳ぐことだった。だが、運動神経は鈍く、山登りも水泳も、ともに人一倍遅く不器用不格好な動きであった。ランニングなどは、小学校時代以来の運動会のビリ争いが定着し、ずっと夢のまた夢の世界であった。

還暦(60 歳)まじかの頃、長年の腰痛が進み、ある日突然、動くと足腰にキーンと痛みが走り、全く歩けなくなった。痛みを堪えやっとの思いで足を運びJR東京病院整形外科に辿り着いた。椎間板ヘルニアで即刻入院手術の宣告だった。手術のお蔭で、足腰の痛みはすっかり消え去った。だが、手術後の3週間にわたる絶対安静のベット生活の結果、脚力がすっかり落ち、杖をついての退院となった。その後、また、山登りに行こうと、勤務先のビル7階まで、毎日、エレベーターを使わずに階段で登り降りをし、足腰の筋力回復に努めた結果、1年ほどかかったが、薄皮をはぐように杖無しの生活に戻って行けた。

その頃であった。勤務先のジョッキングクラブのメンバーから、
「飲み会ばかりでなく、走りませんか」と、春と秋に行われる皇居周回コースでの駅伝大会に誘われた。最初は、「えっ！ そんなこと無理、無理！」との思いだった。

皇居1周は約５km、なにせ、私にはランニング経験は全くなく、高校時代に体育の授業で2km走らせられた記憶があるだけである。

しかし、たまたま、あるスポーツ誌の記事に、「まず距離に関係なく 10 分走ってみること、出来たら次に 15 分、さらに 20 分と試していきなさい。それがランニングのはじまり」とあった。試してみると、なんとか 10 分、15 分と走ることが出来た。そして、クラブの人達の温かいサポートを受けて、皇居でのトレーニングの日々が始まった。

半蔵門の銭湯で着替えて皇居周回コースを走り、湯につかり、それからラーメン屋でビ

ールを飲みながらの反省会。その積み重ねが、皇居周回駅伝大会の参加から、市民マラソン大会参加へと、導いてくれた。

☆　東京荒川マラソン

初めてのフルマラソン挑戦は、還暦過ぎの 63 歳、平成 14 年(2002 年)3 月の東京荒川市民マラソン大会、タイムは 5 時間 19 分であった。その後、毎年2～3回、春や秋の制限時間の長いフルマラソン大会に参加した。だが、いつも最後尾のグループであった。救護車から「大丈夫ですか･･･」と何度も声をかけられながらも、「大丈夫ですよ」と応えながら、関門や制限時間に追われながら、一歩一歩と足を運び続けた。

陸上競技場のマラソンゲートを潜り抜けゴールラインを駆け抜ける達成感は、オリンピック選手と同じ、と思う。それは、「どんなに遅くても、一歩一歩を積み重ねる限り、必ずゴールにつながる」との思いをかみしめる一瞬でもある。

そして、また、次の大会にエントリーすることになる。この感覚は、山登りにもある。きつい登りの途中では、なんでこんな山に来たのだろうと思う。だが、一歩、一歩登りつめ頂上に立った瞬間、すっかりそれまでの登りの苦しさは消え去り、今度はどこの山に登ろうか、と考える。これが生きるということ、人生かな、とも感じる。

フルマラソンのゴールタイムは、年齢とともに、段々と落ちてきた。60 歳代は、なんとか5時間台でのゴールであったが、70 歳代になると 6 時間台となり、そして、ここ数年では、7 時間を超すようになり、制限時間内でゴールできる大会は数少ないものとなってきた。

73 歳、平成 24 年(2012 年)3 月の東京荒川マラソンでは、制限 3 分オーバーの7時間 03 分であったが、完走証は貰えなかった。

なんとか、スピードアップせねば、と階段の上り下りのストレッチを繰り返していたら、足に痛みが走るようになった。

☆　しまだ大井川マラソン

同じ平成 24 年(2012 年)10 月、痛み止めを飲んで、しまだ大井川マラソンを7時間 10 分で完走したが、その直後から、疲労破壊のためか、右膝の痛み、歩くのも大変となった。

また、今回もJR東京病院整形外科へ飛び込んだ。診断は右膝の半月板損傷とのこと。膝の専門医に、「先生、サッカーの本田選手は膝の手術をし、大リーグの松坂投手は肘の手術をし、それぞれ活躍しています。ぜひ、私も再び走られるようにして下さい。」とお願いした。

それは、再びマラソンゲートを走り抜けたい、との思いだった。

現在の医術は見事応えてくれた。半身麻酔で手術の様子はモニターテレビで一部始終見ながらの 1 時間ほどの内視鏡手術、今度は 3 日で退院。後は、指示に従っての筋力回復であった。

夏ごろには、東京都心の歩道をのたのたと走れるようになり、秋には月間 200 kmのジョッギングが可能となった。ただ、残念ながら、もともと、私のジョッキングの速さは、とてもラ

ンニングとはいえないスローなもののため、いつも、歩いている方が私を追い抜いて行くようなしろものだった。だから、膝が治っても、のたのた走り、なのである。

平成 25 年(2013 年)10 月、再び、しまだ大井川マラソンに参加、完走できたものの、タイムはさらに遅くなり、7時間 35 分であった。でも、情の厚い地方の大会は、制限時間を過ぎても完走証を出してくれた。

☆ いぶすき菜の花マラソン

平成 26 年(2014 年)1月、区役所より、75 歳になりました、と後期高齢者医療被保険証が送られてきた。同じ頃、運転免許証も警察署に返納した。マラソンのタイムはどんどん下がるし、なにか、我が人生劇場、閉幕近し、との感じになった。

そんな思いを振り払おうと、人生最後のフルマラソン完走との思いで、1月 12 日(日)、「いぶすき菜の花マラソン大会」に出場した。東京から遠路はるばる、鹿児島の大会にエントリーしたのは、制限時間が 8 時間と国内で一番長く、時間内にゴール出来そうな唯一つの大会だったからだ。

快晴の朝、いぶすき総合陸上競技場前 9 時スタート。エントリーした全員 19,500 人がスターライン通過には 15 分、75 歳以上のランナーは 91 歳を筆頭に 78 人とのこと。前も後ろも、右も左も若い人達で一杯、なにか心うきうきとしてくる。だが、走り出したら、最大標高差 100mのアップダウンの多い一周、42.195 kmは、予想以上にタフなコースであった。最初の 15 kmは高原台地を登りつめて池田湖畔へ、遊歩道には黄色と緑の菜の花満開、だが、足のふくらはぎがぴくぴくとしてくる。つりそうだ。大丈夫かな、まだ 25 kmある。途中で一度でも止まったら終わりだ。我慢、我慢と防風林の中の道を一歩一歩と進む。中間点で3時間 47 分、このまま行けばなんとか制限時間内にゴールできそうだ。我慢が元気になった。青空に映える円錐形の開聞岳を黄色と緑の菜の花畑から眺めつつの一歩一歩。遅いがなんとかたどり着くのが我が身上と、また一歩一歩。35 km地点、山川漁港からの線路沿いの坂道を登る。線路の土手にブーゲンビリアの薄いピンクの花がたわわに続く、このまま行けばゴールだ。だが、指宿市街に入った 40 km過ぎから背中から腰が痛くなった。背中を伸ばし、しばらく走って、また背中を伸ばす、の繰り返し。夕闇迫るころ、やっと、陸上競技場のマラソンゲートを潜り、「やった！」との思いで、制限時間 2 分前、タイム 7 時間 58 分でゴールに飛び込んだ。

東京マラソンに当選していたら、多分、いぶすき菜の花マラソンの「やった！」の感激はなかっただろう。

カミさんがよく言っている。「社長になりたければ、自分で会社をつくれば良い」と。

そうだ、東京マラソンコース 42.195 kmの歩道を、時間がかってもよい、自家製、一人だけのマラソン大会で走ってみるかな、と思った。

人生、誰しもたった一度、生あればこそ、である。

(平成 26 年(2014 年)6 月 14 日記)

H2O

田村　徹

折しも梅雨の季節でアジサイの花が、ジメジメ感にうんざりする季節の到来である。しかし天から齎される水分は砂漠国の人々にはとても羨ましがられることと思われます。

雨水は地表水を太陽熱で気化して上空の低温圏で液化して再び地表に戻してくれる文字通り神の創造された天の恵みである。
化学に詳しくなくても水の化学記号はH2Oであることは知っている。この地球上に存在する水の大部分は海水であり、淡水は約3%に過ぎない。
海水は海の畑の土の役割を担い、我々人類に貴重なタンパク源を提供してくれたり、地球の気温、気候を調整するのに大きな役割を演じている。我々人類の生命活動に水は欠かせない存在であり人体の65%が水分である。
地球は宇宙から見ると天空に浮かぶエメラルド色の球体で、少なくともこの太陽系の星の中ででももっとも美しい造作の星であると思います。出来ることならば、宇宙船から一度見てみたいものです。
こんなに沢山の水があるように見えても、我々人間が手近に利用できる地表の淡水は全体の0．0035%しかないと言われています。勿論淡水資源は北極、南極の氷、地下水などが有りますが、いずれも利用するにはコストが掛かりすぎることが多く余り利用されていないのが現状です。
この淡水ですが、水はいろいろな物質を溶解するために、時には土壌に含まれるヒ素などの有害金属、畑に撒かれた農薬等を溶解するので、充分な科学検査をして安全性を確認しないで、不用意に地下水、川の水を飲んでしまうと健康障害を惹き起こすことが有ります。
日本ではありませんが、バングラデシュのある地域で井戸水に自然界に存在するヒ素が含まれていたため大きな健康被害が出たことが有ります。
又、科学技術大国の米国で半導体工場付近の土壌、地下水が工場で使う塩素系有機溶剤で汚染され、大騒ぎになり訴訟問題に発展してしまったことが有ります。
地下水は地下の湖と言われ数百キロメータの広範囲に汚染が広がることも珍しく有り

ません。
つまり、いくら自然の恵みと思って手近にある河、井戸水等を化学検査なしに飲むことは好ましく有りません。
ヨーロッパ、アメリカの飲料水は硬水が多く、日本の軟水とは味も異なり、余りミネラル分の多い場合、お腹を壊すことも有ります、それぞれの国では水質に合った独自の食文化が育ちました。欧米ではシチュー、グヤーシュ等肉の煮物が好まれますが、これは硬水が肉を柔らかくして味を整えるからだと言われています。
手近にある食材、モヤシは豆を水中で発芽させたものですが、軟水で育てた国産品よりも欧米のモヤシの方がミネラル分が豊富で営養価に富んでいると言われています。
硬水と言うのは、カルシュウム、マグネシウム等を沢山含む水のことで、岩石層を何十年から何百年かけて通過した地下水のことです。
我々が海外旅行するとき、生水を飲まないように注意しますが、これは日頃ミネラル分の少ない軟水に胃腸が慣れているので、急激なミネラル分の増加に内臓が付いていけないためお腹を壊すことが有ると考えられています。
外国の方が日本を旅行して生水を飲んだ時、お腹の調子が悪くなることが有りますが、これは世界一衛生管理が行き届いた水道水でしかも軟水なのに、何故と思いますが、その原因は水中の微生物が原因ではないかと言われています。
胃腸にしてみれば、いきなり未知の微生物と遭遇する訳ですから調子を崩すのも当然かもしれません。
もっとも最近では、衛生管理が行き届いた世界各地のボトルド水が一般的になりましたので、こんな心配は無用かも知れません。
フランスのある有名な飲料水は日本にも大量に輸入され、値段は高いのですがその理由はメーカーで採水する井戸の周辺数十キロ圏への人、家畜の立ち入り、農薬の使用を禁止して安全なミネラル水の確保に努めているため、周辺環境保全に大変コストが掛かっているための様です。
僕は紅茶それもミルク紅茶が大好きですが、流石にイギリスで飲むミルク紅茶は世の中にこんなに旨い飲み物があるのか何時も感心させられます。どうもその最大の貢献者は紅茶葉の良し悪しよりも、洒落た茶器、特に硬水にある様です。
日本語にも、水に纏わる単語が沢山有ります、「みずみずしい」「水臭い」「みずもの」「水入り」「水商売」等枚挙に暇が有りませんが、太古の昔から如何に人間生活と水の係りが深かった理解出来ます。

僕は大学で化学を専攻しましたが、今でも恩師の言葉で最も印象に残っているのは「将来、WATER BUSINESS」こそが人類に役立つ社会貢献分野になると講じられました。
当時はこの恩師の言われる本意が十分に理解できませんでしたが、社会に出て10年、20年経つにつれ、その意味が理解できるようになってきました。

水は水素と酸素からなる奇跡の化学物質で、植物は水と炭酸ガスが有れば、太陽光を浴びながらどんどん成長します。その時、酸素も放出してくれますのでこんなに有りがたい生き物が身近にいてくれるのは正に奇跡です。
今エネルギー危機、食糧危機が叫ばれていますが、この問題の救世主になり得るのは、健全な水の保全が必要です。人類の知恵は素晴らしいもので、トマトの水耕栽培では一本の木？に数百個もの実を実らせることができます。勿論これには、水耕栽培水の精密な管理が必要ですから、頻繁な水質分析、栄養科学物質の補給、消毒等正に化学の出番です。
アラビア諸国は石油は出るけれども、万年水不足に悩まされています。この問題を解決するため、北極海の氷山にロープを結わえて船で引っ張ってこようとするプロジェクトが真剣に検討されたことが有ります。流石にコストが合わず断念された様です。
そこで、活躍しているのが、日本製の海水を淡水化できる分離膜です、まさに化学技術の出番がやってきています。
身近な事例では、家庭で主婦の方も簡単な塗装は自分で行うことが多くなってきました。
最近の塗料は人体に有害なシンナーとして水道水で簡単に希釈できる塗料が大人気でプロの方もご自分の健康被害、大気汚染防止に役立っています。正に「WATER BUSINESS」の真骨頂です。
化石エネルギー資源の枯渇の危機が迫っている現在、注目されているのは、チタン系の触媒を使い、水に光照射をして水素と酸素に分解して、水素エネルギーを得ようと研究が行われています。この夢が実現すれば、水を原料にして水素と言うクリーンなエネルギーが得られますので一日も早く実現して欲しいものです。

後期高齢者と呼ばれる年代になってしまった僕には水を利用した新エネルギーの開発に参画することは無理ですが、せめて、隣国が買収攻勢をかけているらしい日本の淡水資源を守ったり、近くを流れる河川の水質保全、日本の名水と呼ばれる地下水保全には市民の一人として参加して行きたいと考えています。

TEA　TIME

戦後日本の発展を支えたイノベーション

公益社団法人発明協会（会長・庄山悦彦日立製作所相談役）は６月１８日、産業や経済の発展に大きく貢献した「戦後日本のイノベーション１００選」の第１弾として、新幹線やウォークマン、インスタントラーメンなど３８件を選んだと発表した。 同協会はインターネットなどのアンケートの得票数で１０件を選び、ほかに時期を高度経済成長までと限定し、発明や事業から２８件を選定した。

戦後日本のイノベーション

※発明協会による

アンケートで選ばれた10件

1950年	内視鏡
58年	インスタントラーメン
63年	マンガ・アニメ
64年	新幹線
70年	トヨタ生産方式
79年	ウォークマン
80年	ウォシュレット
83年	家庭用ゲーム機・ゲームソフト
93年	発光ダイオード
97年	ハイブリッド車

高度経済成長期までの28件

1948年	魚群探知機
49年	溶接工法ブロック建造方式
51年	フェライト
52年	ファスナー
53年	鉄鋼一貫臨海製鉄所
55年	自動式電気炊飯器
55年	トランジスタラジオ
56年	コシヒカリ
58年	回転ずし
58年	公文式教育法
58年	小型(軽)自動車
58年	スーパーカブ
59年	ヤマハ音楽教室
62年	リンゴ「ふじ」
64年	人工皮革
64年	電子式卓上計算機
65年	自脱型コンバインと田植機
67年	カラオケ
67年	自動改札システム
68年	柔構造建築
68年	郵便物自動処理装置
69年	LNGの導入
69年	クオーツ腕時計
60年代	ブラウン管テレビ
60～70年代	脱硫・脱硝・集じん装置
72年	電界放出型電子顕微鏡
73年	CVCCエンジン
74年	コンビニエンスストア

公益社団法人 発明協会（**Japan Institute of Invention and Innovation**、**略称：JIII**）：発明の奨励や特許等の産業財産権の普及啓発（発明奨励）や青少年創造性育成事業等を実施する公益法人

全国発明表彰・地方発明表彰 ：優れた発明を行った開発者を表彰している。全国発明表彰の最高賞である恩賜発明賞は、学術分野における日本学士院恩賜賞、芸術分野における日本芸術院恩賜賞と並ぶ技術（発明）分野における恩賜賞である。また、全国発明表彰は、大河内記念賞、市村賞と並んで技術分野における主要な表彰である。

少年少女発明クラブ：全国で約 200 ヶ所あり、子どもたちの創意の向上に寄与

TPP と PPK

関　敦

現役の時もアルファベット 3 文字表記に悩まされた。特に、変化のスピードが速かったパソコンや関連電子技術、通信技術用語としての 3 文字が次々生まれ、覚えるが大変だったという記憶がある。CRT、CPU、MPU、LCD、TFT ぐらいまでは何とか理解できたが、昔の資料に書いてあった IPS、ITO、MVA、ASM、OCB なんぞは今見ると何のことやら、さっぱりわからない。あれからも連日のように、新語が続々生まれているに違いない。アキバの AKB に続き、NMB、SKE もあることを知ったのは最近のこと。野球用語の SBO(ストライク、ボール、アウト)の表示がいつの間にか、BSO に変わっていた。大リーグと同じ表示にしたらしいが、日本が SBO 表示を使っていた理由を説明してくれたのかしら・・・。

TPP は Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement の略で「環太平洋戦略的経済連携」のこと、経団連や農協他各業界の意向はさまざまで、議論が国内を二分している。日経新聞の朝刊に「TPP で喜ぶのは、誰だろう？」という一面の大きな広告が掲載されていた。広告を出したのは JA 全中だが、その広告は農業分野だけでなく、繊維・衣料品や知的財産、医薬品までに及ぶ問題が提起されており、たいそう大がかりな広告だった。繊維、衣料品や医薬品業界も農協と一緒に TPP に反対してほしいということなのだろう。いずれにしろ、TPP による国益と民益の一致は難しいに違いないし、民益といっても企業と国民では相反する場合が多い。各国の思惑がなかなか一致しないのが現状のようである。

PPK や PPP というのもある。前者は「ぴんぴんころり」のことで、後者は「ぴんぴんぽっくり」で二つは同義語である。「PPK で悲しむのは、誰だろう？」という新聞広告を見たことはないが、本人はもちろんのこと、残された家族にとっても、また国の財政面でも PPK は大変喜ばしいことに違いない。従って、こちらの方は国益と民益が完全に一致する。私を含め、高齢者の切なる夢だが、実現はなかなか難しいということを最近知った。若干古いデーターだが、日本人の 65 才以上で亡くなった人の寝たきりの平均期間は 8.5 ケ月という記録がある。延命医療技術が発達しているので、現在は寝たきり時間がさらに長くなっているのだろう。小生の母は百才を目前に亡くなったが、10 年近く寝たきりだった。

数年前、当時は東大教授でジェンダーの専門家、介護問題にも携わっていた上野千鶴子さんの講演を聴いた。著書「おひとり様の老後」がベストセラーになっていたころだった。同書は女性のおひとり様向けに書かれたものだが、その後、「男おひとり様の老後」も著され、小生の老後生活に活かしている。日本は超高齢社会=人生 85 年時代に入っている。人生のピークがいつだったかは個人差があるだろうが、前半生は「成長、発展、進歩」の上り坂、後半生は「衰退、縮小、退歩」の下り坂、前進戦より後退戦の方が難しいと、その講演でお聞きした。登り坂を登るノウハウはあるが、下り坂を降りるノウハウは不足しているからである。でも、ピークを過ぎても人生は続く。視力、聴力、脚力などの体力の低下に加え、思考力や記憶力の低下も自覚して、無難に下り坂を歩きたいものである。

「老いは文明のスキャンダルである」と言ったのはフランスの作家で哲学者のボーヴォアール女史、彼女の著書「老い」に書いて。新聞やテレビで気付かされる「介護疲れによる悲劇」や「独居老人の孤独死」はまさにスキャンダルに違いないし、他人事でもない。

右の写真はサルトルにチェ・ゲバラと老いてますます盛んな彼女。

2003 年 6 月に「2015 年の高齢者介護」と題する報告書が取りまとめられた。「戦後ベビーブーム世代」が 65 才以上になりきるのが 2015 年。団塊の世代は 8 割がサラリーマン、厚生年金の受給者が中心であり、進学率の向上、受験戦争、バブル経済やリストラ等、戦後の社会変動を牽引してきた人々。これまでの高齢者とは職歴や価値観が大きく異なる世代であり、介護サービスの利用者になるときに、「介護サービスの内容やシステム」はどうあるべきか、「利用者側の観点」から介護のあり方が検討されてきた。結論としての基本理念は「高齢者の尊厳を支えるケア」とのこと。「高齢者がたとえ要介護状態になったとしても、その人らしい生活を自分の意思で送ることを可能とすること」だそうである。2015 年は来年、消費税は 10%に上がるけど、相変わらず「老いは文明のスキャンダル」なのだろう。

（2014-6-28 記）

What?　Why?　How?

高松　泰代

衝撃だった。12歳のまだこどもの目の前の扉が開き、そこに果てしなく広がる世界に茫然として立ちつくした。
動詞が初めのほうにある？　目的語の後に‘を’が無い？　後ろにあるはずの助詞が単語の前にある？‘日本語が人間の話す言葉’と信じてきていたから、‘日本語と違う形をした言語がある？　一体なぜ？どうやって？そんなものが存在する？’
教科書も先生も、このように衝撃的なことを驚きも興奮もしないでクラスで話していられるのか？

母に連れられて、外人という人たちには小さいころから会っていたから、違う声で違う音で話していることは経験していた。’大人たちは、こどもと違う言葉で話すものだから、分からなくても自然なこと‘と思ってきていた。大人の人が使う言葉と同じように。意味はわからなくても、真似てご挨拶をしてきた。

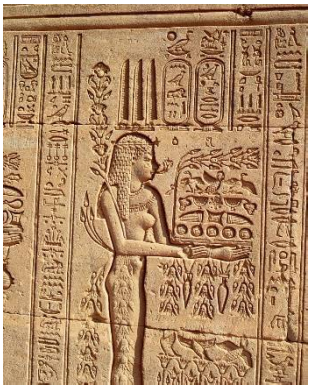
中学のクラスに英語というものが始まった。そこで初めて英語が日常使う言葉であり、それが日本語と途方もなく違う形をしていると告げられた。困惑の中から、私は地球が、宇宙が途方もない存在だと感じることで理解することにした。そして永遠に広がるこの世界には、そこに存在するものが、言葉だけでなく全てがそれぞれ違うということなのだろうという仮定をすることで、衝撃で立ちつくしていた自分を辛うじて支えることができた。それは又その後の私の人生で終わることのない疑問への解答探しの始まりでもありました。振り返ると、私の人生に起こる様々の事柄に出会う度に、この解答探しの鍵を見つけようとしてきています。

学習障害ということがどのようなのかはとてもよくわかります。教室に座って授業をうけることが、先生のお話に興味がなければ聞いていることが、与えられた教材をそのまま受け入れることが、苦痛とはいかなくとも心地よいことではありませんでした。わがままで我慢ができないのだとわかっているけれど。座っていると気分がわるくなり、保健室に保健係の友人に連れていってもらうことになりました。罪悪感を持って過ごした10代でした。　教室で答える、テストに答えを書く。正解の点数の答案を見るたびに、罪悪感に襲われる。‘求められている回答は知っている、しかし自分はこの問題について本当に完全に理解していないのを知っている。根本が理解できない苛立ちと、理解していないのに不当な評価を受けているという罪悪感。 何一つ理解していない、わかっていない自分。しかし10代になると、そのままの自分でいるわけにはいきません。答案に’答えを書くことはできます、しかし私は理解していません‘とどんなに書きたかったか。しかし頭にコピーされた答えを書き続けました。それを大人は社会性が育ち、大人になっていっているというのです。

内面と外面の二重性は欺瞞だという思いからか、もう一人の自分がそばにいて、話すようになりました。私はそのもう一人の言葉を大事にして過ごすことにしました。自分が欺瞞の中に取り込まれないように、いつか正解がわかるときのために。自分だけの中では多弁であったけれど、当時の私は人からは、無口で非社交的で暗い女の子にみえていたはずです。

英語が、’知らないことを知り、ことがらの根本が分かることが可能であると思える‘一つの道、罪悪感からの解放になりそうな気がしました。言語に関する記事、書物が自然に目にとまり、どきどきしながら読みました。世界には多くの言語があるということから、二つの仮定を設定しました。1）元々言語は一つであった。2）多くの言語が発生してきた。聖書のバベルの塔の話は　1）の説明となります。1）を想定すると、全世界の言語が将来一つの言語になる可能性があるという想定はわくわくするものです。言語間の共通部分を集め、その根本にあるひとつの形式を見つけたい。そこで英語と日本語の考察をすることにしました。両者の違いと共通点。　仮定が現実となると信じやすい性質のおかげで、この考察の完成を信じて過ごしました。英語を母国とするビジネスマンに日本語を教えるという幸運に恵まれました。過ぎる年月の間に、英語と日本語のそれぞれの特徴を単純化することも可能となりました。しかし年月が過ぎても、英語と日本語の共通点はいつまでも遠くにあるだけです。わかってきたのは、英語と日本語は世界の言語の中でも、もっとも両極端にあるのかもしれないということです。　結局仮定2）が人間の言語発生の事実であると思わざるを得ません。

そしてこのごろ思うのです。言語は人の生きる自然的、社会的環境の中で必要として生じてきた。それぞれが違うのは当然のこと。生物、そして人間がひとりひとり違うということを真実として受入れるところからこそ、共通理解の方法がわかることになるのだろうと。
今願います。できるだけ多くの’違い‘を知りたい。図書館に行き、いろいろな言語の入門書を借りてきます。そこにある文字、言葉の形式を覗いています。
そしていつも感じるのです。‘世界の言葉の共通点はどこに？’と12歳のときからの夢を相変わらず追っている自分を。



人身事故

渡辺　成典

梅雨の季節は乗務員泣かせである。無蓋車に山積みされた粘土は、昨夜から降り続いた雨をたっぷり吸いこんで重く、雨で車輪が滑って山越えに難儀するからである。始発の小川郷駅助役が持ってきた通知書には、定数ぎりぎりの数字が書き込まれていた。

「まったく上の奴ら、雨が一晩降ったらどのくらい重くなるか考えもしないで通知書を出しやがる。知っていたら貨車の一両や二両減車しろよ。人間だってずぶ濡れになったら、衣服にかかる重さは倍ぐらいになるだろう。そう思わんか」。私の肩ぐらいしかないが、鼻っぱしの強い機関士だった。発車時間が近づき、腕木式の信号機が45度に下がって進行を現示した。

雨合羽の間から吹き込んでくる雨が、助役の顔を濡らし秒針を追っていた。残り2分を切って機関士は運転席の窓から「少し早いが、定時出発ということで行こう。手を上げてくれ」。

機関士が責任を持つから、じたばたしないで出せよと言う凄みみたいなものを感じた。道中で何かあれば、その責めを一身におう矜持だろうか。出発進行といつもより大きな声で気合を入れ、ゲートが開くのを待ちきれない駿馬D6019号のいななきが、安全弁から噴き出した。

夏井川の鉄橋を渡ると、左に大きく曲がってなだらかな坂に出る。詩人草野心平の生まれ故郷あたりで加速するのだが、この日は後部から引っ張られるように重い。それでも夏井川渓谷の山裾をポッ、ポッ、ポッと心臓が破裂しそうな悲鳴をあげながら、地を這うように踏ん張っている。26.4 kmある夏井川駅までの山越えを終えた時、ご苦労さんありがとうとスコップを置きながらステップを撫でた。それでも2分遅れていた。

終着の一つ手前の菅谷駅は45km の速度で通過し、受け渡しのすんだタブレット（通行手形）を機関士に手渡し椅子に腰をおろした。蒸気を使ってシュッポ、シュッポと走る力行運転から、坂道を転がる惰行運転に変わって音は消えていた。

辺り一面は霧が立ち込め、電柱の三本目がようやく見えるほどの視界しかない。杉の防風林の所を右カーブしたところに作場道があり、木枠で囲んだ人がやっと通れる幅の踏切があった。私は山を登り切った安堵感ともうすぐ終着の大越駅という気の緩みがあったのか、汽笛を鳴らさないで漫然と前をみていた。突然、線路上に黒いものが飛び込んできた。「アカ、アカ、アカ」と絶叫し、汽笛を鳴らし続けた。非常ブレーキの空気音が運転室に響き渡り、間もなく鈍い音が追いかけるようにドスンと聞こえた。

「やったなー、何にぶっかったんだ」

「それがよくわからないが、人だと思う」

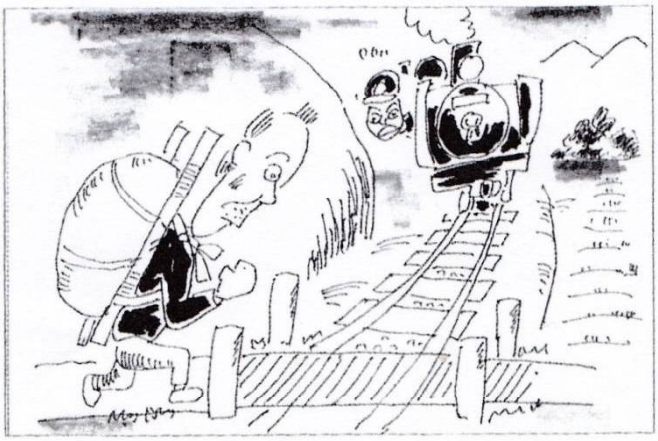
私は足をガクガク震わせ、目を瞑ってしまったらしい。重い粘土列車は止まるまでずるずるとブレーキ距離が伸びる。「携帯電話器を持って先に行ってろ。俺は転動防止手配とってからすぐ行く。」

機関車の周りを見ると、着衣も血痕もないが排障器の辺りが凹んでいる。300m ほど戻ると老父が倒れ、ズボンが大きく裂け大腿から鮮血が噴き出していた。機関士がやってきて耳元で怒鳴ると気がついたのか、恐怖で目がひきつっている。襟首に巻いていた私のタオルをナイフで切り裂き、自分のものと一つに結んで左大腿の上ぎっちり締めて止血した。

汽笛に驚いて田圃から人が集まってきた。「〇〇さんだべ、こりゃ大変だ」と騒ぐ人の名前を聞いて、病院への搬送を頼んだ。

事故報告を終えた機関士は、何でもなかったように落ち着いていたがポツリと漏らした。「線路脇に靴を揃えて、幼い子を道連れにした時があってね。かわいそうで、むごくて。鉄道で命を落とすなんて絶対やっちゃなんねー。残された人の悲しみを考えたら絶対に」と声を絞るように言った。

現場を45分遅れて鳴らした汽笛は、哀惜の響きをたたえながら靄に吸い込まれていった。



デルフィニューム

藤原　昌子

駅に降り立ったのだが、バスが来るまで少し時間がある。こういう時よくやるのが、横町の花屋さんに寄ること。夕方になったり雨模様だったりすると花を気前よく大幅ディスカウント。この日も色とりどりの花束がバケツに一杯どさっと入れられていくつも並べられかなりお安い。魅力あるけれど重いしな～。行きつ戻りつどれなら持って帰れるか品定めするがすでに買い物をした手には少々きつい。でも折角だし。その時、端に白いビニール袋に入れられたブルーの花が目についた。中を覗くと丈が 25 センチくらいのデルフィニュームが二鉢入っている。お手頃、今日はこれにしよう。もう鉢には手を出さないという決心はいつももろくくずれさる。バスに揺られながら、それにしてもこのデルフィニューム、丈は短く、色も薄い。しかも二鉢込でセールなんて。今昔の感あり。でもがっかり。日本でデルフィニュームを見かけるようなったのは嬉しい驚きだけれど、やはり日本の気候で立派な花を咲かせるのは無理なんでしょうと思った。

デルフィニュームと衝撃の出会いをしたのはチェルシーフラワーショーでだった。 お向かいのフラットに住む老婦人には二人の小さい子を抱えて夫の転勤でそこに引っ越して以来何かとお世話になっていたがその方のお誘いだった。いつもは近所の人々の憩いの場所としてオープンされているロイヤルホスピタルガーデンはたくさんのテントが張られていて、中には様々なミニガーデンが作成されていた。一緒に持ち込まれていた園芸グッヅも四阿もおしゃれで日本とは違うがお花好きの国民性も歴史も納得できるスケールだった。感嘆しながら奥まで誘われるように歩き回り疲れて戻ろうとしたときたくさんの背の高いブルーの花が嫋やかに、でも威厳をもってすっくと群生しているかのように植え込まれているのが目にはいった。ベージュのテントに光が差し込みそれを背景に見たこともない鮮やかなブルーと見たこともない形状でたちまち虜になってしまった。英国の冷涼な気候でこそ生育するのだろうとどこかに群生している景色を想像した。それはきっと夢のような場所に相違ない。

フラワーショーの期間中はあたりの雰囲気が一変し、いつもは静かな住宅街が期間中は駅から会場まで人々が楽しげにおしゃべりしながら延々と続くのだ。早朝から異様なざわめきが四階の我が家のフラットまで立ち上ってきて、何が起こったのかと下を覗くと歩道にぎっしりの人々の列とそれをガードする馬に乗った何人もの警官。 規模の大きさ、人々の期待に満ちた夢中な様子に通り一遍のフラワーショーではなさそうとの推定はできた。その後かなり経ってから日本人のガーデナーがこのフラワーショーで何かの部門の賞を取ったと新聞で報じられた。近年はもっと大きな賞を取った人がいるとの報道が頻繁に報じられるようになり、庭園の新たな魅力の提供に寄与されていることを知った。

そして、デルフィニュームも品種改良が進み日本でも育成がそれほどむずかしくはなく

なったようだ。貧弱で安売りで‥とがっかりしたがそれは矮性のものができ色のバラエティーも増えたということのようだ。なんとなく名前の由来はギリシャのデルフィーにあって興味深い話に基づくのではないかと思っていたが蕾がドルフィンの頭に似ているからと知り苦笑してしまった。それはそれで悪くはないけれど、名前を付けた人は蕾ではなく花からインスピレーションを得なかったのだろうか。日本の花にも名前に詩情あふれるものもあればかわいそうな名前をつけられているものもある。

毎月ボランティアとしてお寺で花を活けている知人がいるが、先日これから行ってくるという彼女に何を使うのか聞いたところ “デルフィニュームとね･･･” との答え。お寺でデルフィニュームね･･･と少々びっくりしたが　丈があって空間に映えるし涼しげでなかなかよさそうと思えた。そういえば彼女はイギリス生活が長く、イギリスのフラワーデコレーションの先生であった。

日本人のガーデナーがイギリスで活躍し、美しい花の品種改良が進み、外国の花が和の空間を飾る。どの分野でも進んでいるよき刺激、交流。誠に結構なことである。
人間の知恵はこのように使ってほしい。誰しも生まれるところは選べないわけだが　緑など望むべくもない、日々の生活も危機にさらされている地域　知恵を発揮しようにもできない地域、そこに住まざるを得ず短い命を終えるような人が減ることを願う。

サウディアラビア訪問記（3）

藤井　能成

初めてリヤドを訪れた時に夜の旧市街の見物に出たことがあった。絨毯などの店がある商店街は少し薄暗くて人通りが少なく寂しげであったが、金細工などの宝飾品を扱う店が軒を連ねる一角に出ると、昼間は全く見かけることのなかった大勢の女性達が、黒いアバーヤを頭からまとった姿で幼い子供の手をひいたり、あるいは2･3人連れで道を行き交い、店に出入りしていた。店を覗くと眩いくらいに明るく照明された店内で、にぎやかに相談したり店員と交渉したりしていた。

聞く所によると、貯めたお金を足して金の鎖や装飾品をより高価なものに買い替えたりするのだという。殆どの金細工は23K以上で赤みを帯びた黄金色のためか、店の中は外から覗いても華やかに見えた。鎖の留め金も純金の柔らかく折れにくい性質を利用して、針金を折り曲げて交差させるだけの簡単なものが多かった。金細工の価格は重さを秤で測って決められ、特にデザイン料が付加されるのはヨーロッパなどの有名ブランド品だけであるという。

最初の訪問の時の通訳のHさんは我々との打合せや正式でない会合の時にはタウプと言う民族衣装の上に洋服の上着を羽織った革靴姿であった。しかし、会合が正式なものであると聞くと洋服の上着は着ないで、アフラームという布で頭を覆い、イカールと言うゴムの黒い輪を頭に載せた姿で出席した①。彼は日本留学中アルバイトで制電性の布地を宣伝するテレビコマーシャルに出ていたと話していたが、おそらく乾燥した砂漠でも静電気に悩まされることがないと、タウプ姿でコマーシャルに出ていたのだろう。白いタウプもあればグレーやベージュ色のタウプを着ている人もいた。研究所内では靴ではなく革のサンダルを履いている人が多かった。ホテルのロビーや空港ではタウプの上にミシュラハというコートを着ている人も見かけた。タウプやアフラームが気候風土に最適な衣装であることは容易に理解できるが、彼らが民族衣装を正装として誇りをもって守っていることには感心させられた。

2度目の訪問は12月中旬であったので、日本大使館が開催した天皇誕生日の祝賀パーティーに我々も招待された。サウディアラビアなどの外交関係者とサウディ在住の日本人も招待され、通訳のHさんはダーランから日本人の奥さんを呼び寄せて参加していた。我々がサウディアラビア国内でアルコールの入ったビールやお酒を飲むことが出来たのはこのパーティーの一回だけであった。にぎり鮨や焼き鳥など日本の料理も出ていたが、寿司は韓国人の

料理人が握り、焼き鳥はフィリピン人が料理したという。Hさんによれば、サウディ国内でもたまにウィスキーなどの洋酒が手に入ることがあるという。そのような時、人目につかぬよう一晩で飲み干して瓶は細かく砕いて砂漠に捨ててしまうというが、そういう飲み方はかえって体に悪いと話していた。次の年に大使館を表敬訪問すると、去年のパーティーでは酔いつぶれてソファで休み翌朝帰ったサウディ人が何人かいたという。

このパーティーの最中に一時激しい雷雨に見舞われた。プール脇の庭の会場から屋内に避難したが、サウディアラビアで雨にあったのはこの一回だけであった。翌日外出すると立体交差の下側になる道路の最も低くなった部分には、排水設備のないためか、雨水が貯まり車の通行を妨げていた。

3度目に訪問した時、滞在中の予定の打合せを済ませたあと少し時間があったので、マスマック砦②を案内してもらった。10 年にわたりクウェートで亡命生活を送った後、オスマン・トルコや英仏独ら列強が影響力を強めるなか、アブド・アル・アジズ・イブン・サウードがアラビア半島を統一し、王国建国の基礎を築いたその記念碑的な場所である。

マスマック城に着いた時は見学時間外であったが、通訳の人が有力者一族の出身だったのか、我々の説明をすると直ぐに許可して内部を案内してくれた。砦はさして広くないが、頑丈な扉③、中庭の井戸、居間の様子②、④などを見ることができた。建国当時のリヤドの街の写真や闘いの様子を描いたイラストなども展示されていた。

マスマック城のある Dira 地区にはグランドモスクがある。このモスク前に処刑場があったと聞いていたが、私たちが訪れた時にはその場所にはタイルが張られ、タイルの細孔から幾条もの糸のような水を吹きあげる噴水が設置されてその表面を洗っていた。写真⑤は商店街とモスクの前の広場に続く公園との境にある椰子の木（写真⑥）の下のベンチに腰掛けて、モスクの方向にカメラを向けてひそかに撮ったものである。噴水は写真⑤の右側の椰子の木の横のモスクの前の建物の陰に隠れている。夕陽を眺めにモスクの脇を通ると、開け放たれたモスクの扉から日没の礼拝をしている多くの姿が認められた。

ジョイント・セミナーが毎年 12 月または 1 月に開か

れた理由は最も快適な季節がこの時期であることと、ラマダン月を考慮して決められていたと考えられる。リヤドの 12～1 月は日本の 4 月頃の気候で、日中の日差しはほどよく、夜間も寒いことなく、大変過ごし易かった。もう少し後の春先になると砂嵐が起きやすい時期になり、5 月以降は真夏以上の、7・8 月は酷熱の季節となる。通訳の人の話では、砂嵐に襲われると視界が遮られて車は使えなくなって空港も閉鎖されることがあり、二重窓の家の中までどこからともなく砂が入って来るという。

⑤

⑥

三度目の時の通訳の人も日本に留学していたという日本語の上手な、日焼けした精悍な顔つきのサウジ人であったが、長い睫毛が豊かな優しい目元をした人であった。彼は日本人と比較して長い睫毛であることを意識していて、ラクダの目のように砂漠での生活に適応しているのだと冗談を言いながら、マスマック砦を案内してくれた。またラマダンの時期には日中の飲食が禁じられるだけでなく、ムスリムでない外国人に対しても、例えば車を運転しながらタバコを吸っていると、車を止められて喫煙を注意されることがあるという。

何度目かの訪問の時、PEC 中東事務所の所長さんが夜のリヤドの散歩に誘ってくれたことがあった。パーティーもなく予定がなにもない時間を持て余す夜だったからであろう。印象に残っているのは、ホテルの周りの街灯の下に大勢の男たちがたむろしていてなんとも薄気味悪かったことである。事務所長さんによれば多分結婚式が行われているのであろうという。花嫁は女性だけが集まるパーティーで祝福を受けるので、外で待つ男達はパーティーに出席している妻や娘たちを迎えに来て宴会が終わるのを待っているのだという。移動手段が車しかない大都市リヤドではタクシーが普及しているが、運転が出来るのは男だけであるので、夫や男の家族を伴わない女性がタクシーを利用することもありえない。イスラムの教えを厳しく守っているこの国では女性の権利が奪われているという見方もできるが、その代わり女性たちは夫や父親たちに手厚く守られてもいるのである。実は彼が散歩に誘って我々に見せたかったのはこの夜更けの情景だったのかもしれない。

子どもと養子の激減

湯沢　雍彦

私には子が 2 人いて孫が 4 人いるから、日本人の家族としてまずは普通のことだろう。

といっても、孫は子のそれぞれに 2 人ずつではない。長女には 2 人の息子があったが、近所の友人たちが「2 人では淋しいから 3 人目を生みましょうよ」という言葉にのったら、双児の娘が生まれてきてしまった。私のツレが喜んで大きな雛人形のセットを求めたので、桃の節句に近い季節は華やぎはあるものの、部屋が狭くなって不自由している。

下の娘は仕事を続けていて未婚なのでもちろん子はなく、孫は 4 人で落ちついた。人口問題研究所の『人口統計』をみると、日本既婚女性の平均出生子数は 2010 年でも 2.1 人とあるから、この数はごく普通といえる。だが、全国では結婚しない女性が増えてきたので、最近の出生率は 1.41（未婚女性も含む）人で 2 人には遠い。自減につながるこの傾向が続けばあと 300 年で日本の総人口は 500 万人を割りこみ、400 年先には「そして誰もいなくなった」になってしまう。もっとも日本列島は気象条件が良くて土地も肥えている所だから、近隣諸国から移住者が殺到して、別の人種で溢れることだろうが、純日本人が居ない日本列島になりそうである。住宅団地や高速道路などの施設は誰かが使うだろうからいいとしても、立派なお墓などは誰がどう弔うことになるのだろうか。

こんなことを書き出したのは、実子の数とともに「養子」の数も激減していることに気がついたからである。養子は、成年者ならば年下であれば（1 日違いでもよい）何人でもとることができる。夫婦片方の養子でもよい。かなり自由な制度で、私が子どもの頃には各学年に 2～3 人の養子がいたものだ。戦前には統計がないが、全国ではおそらく年間 10 万人近くにもなったのではないだろうか。戦後の民法では、未成年者を養子にする場合、直系卑属を除いては家庭裁判所の許可を要することに変ったので、司法統計で確認できるようになった。新民法 3 年目の 1950 年には年間で 4 万 9000 件もあったが、その後は年々減り続け、2012 年には特別養子を含めても、たった 1,129 件になってしまった（特別養子とは、とくに不幸な状況にある 6 歳未満の子にのみ適用される。）。62 年前に比べれば 2.3%という少なさである。もっとも、養子が成人になっている場合も含めた全体の養子縁組は 2012 年でも 8 万 1000 件もあって、こちらも減ってはいるものの 2 割減程度であって、大きな変化ではない。未成年養子縁組だけが大幅に減ったのである。

減ったのは、配偶者の連れ子を養子にする場合以外、すなわち直接の血縁関係のない他人の子を養子にするケースである。これこそが、本来の養子らしい養子なのに、どうしてなのだろうか。

年間 2 万 4000 件もあった 1957（昭和 32）年の資料が残されているが、養親・養子それぞれの側に理由があった。養親では、「子がない」が過半数を占めていたが、

「子はいるが女なので男子を貰いたい」のほか、「老後の面倒を」「家を絶やしたくない」といった古めかしい理由のほか「現に助けてもらっている」も多かった。また養子側にも、「兄弟姉妹が多い」、「家計が苦しい」といった事情が多かった。現代はこういう事情は減ってしまった。そして当時は社会保障が皆無に近かったので、扶助してくれる子が必要であり、子を出す側も、子沢山で貰ってもらう必要が大きかった。これが変わったので、減って当然なのであろう。

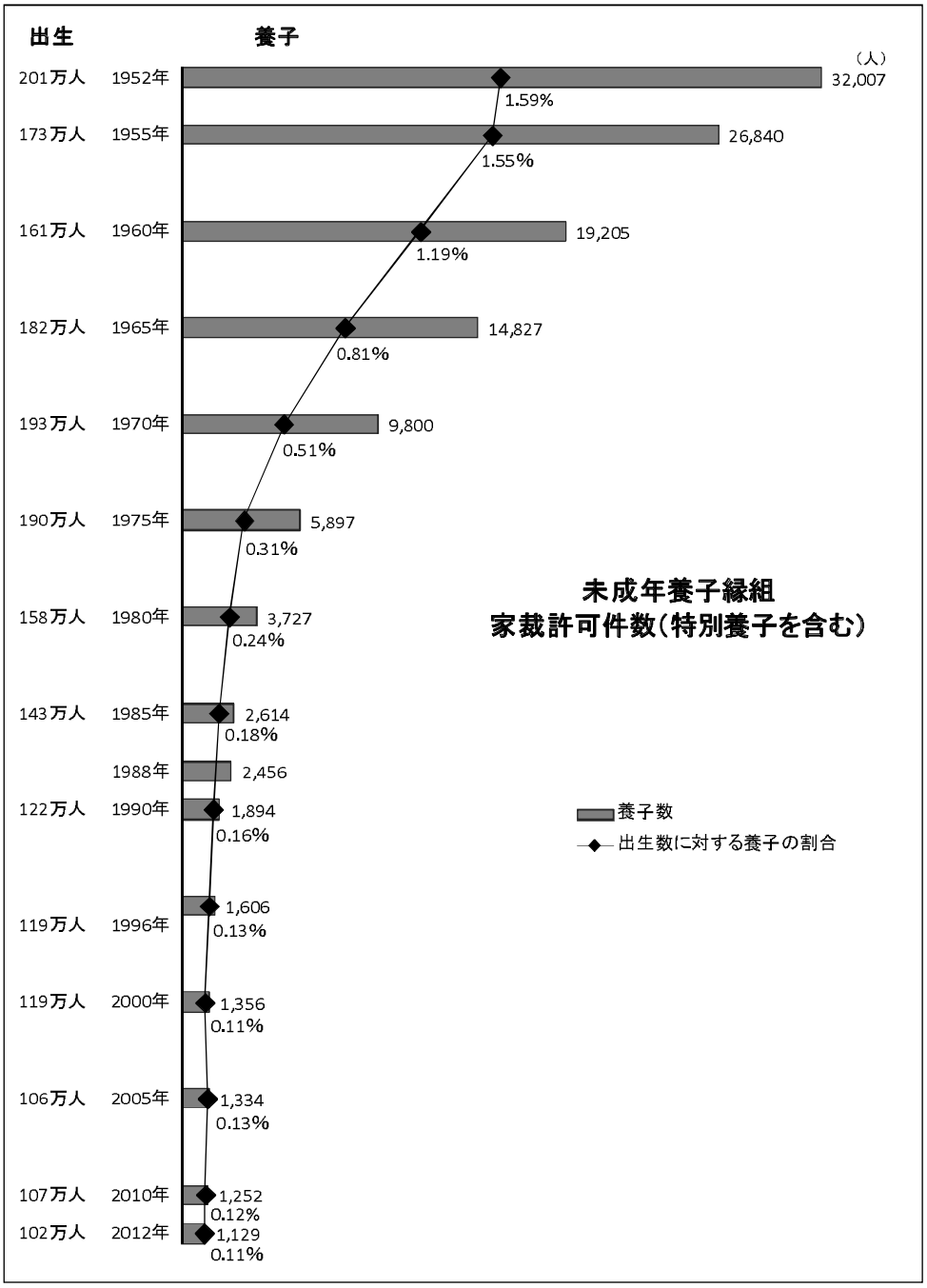
表. 養子縁組件数の推移

	全養子縁組	うち家裁許可養子
1952(昭和27)	102,297	32,007
1980(昭和55)	89,512	3,552
1989(平成01)	83,112	1,491
2012(平成24)	約81,000	1,129

しかし、「子が生まれない」「子を生まない」夫婦は 30 年前には若中年夫婦の 4%程度だったが、最近はその倍にもなってきた。意図的に子を持とうとしない夫婦が多い。実子を含めて、日本人はどうも「子育て嫌い」になってきたようだ。無子を主義としている夫婦は別として、子を望む夫婦は養子になれそうな子をもっと探したらどうだろうか。全国の児童養護施設には乳児院を含め 4 万人近くの幼児と児童がおり、その過半は新しく親になってくれる人を待っているのである。

図表、家裁許可未成年養子縁組数の推移

（自己または配偶者の卑属を養子とする場合は除く）



注、「人口動態統計」と「司法統計年報」による

つくしくらぶ　―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役にたたないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥いる現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成11年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“（人に）尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は,なにも国と国との間にだけあるものでありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成18年9月5日、その認証（府国生第859号）を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。

江口春畝様（会員）

平成 26 年 7 月（第 8 巻 3 号）貝坂倶楽部
発行所　NPO つくしくらぶ出版
102-0093 東京都千代田区隼町
2-12 藤和半蔵門コープ 801
email　tpine304@nifty.com